

樺  
の  
木

狐

土  
神

土  
神  
と  
狐

一本木の野原の北のはずれに、少し小高く盛り上がった所がありました。いのころぐさがいっぱいに生え、その真ん中には一本の綺麗な女の樺の木がありました。

この木には二人の友達がありました。一人は丁度、五百歩ばかり離れたぐちやぐちやの谷地の中に住んでいる土神で、一人はいつも南の野原のほうからやってくる茶いろの狐だったのです。

樺の木はどちらかと云えば狐のほうが好きでした。

なぜなら、土神は神という名こそついてはいましたが、ごく乱暴で髪もぼろぼろの木綿糸の束のよう、眼も赤くいつも裸足で爪も黒く長いのでした。

ところが、狐のほうは大へんに上品な風で滅多に人を怒らせたり気にさわるようなことをしなかったのです。

ただ、もしよくこの二人をくらべてみたら、土神のほうは正直で狐のほうは少し不正直だったかもしれせん。

夏のはじめのある晩でした。空にはもう天の川がしらしらと渡り、星はいちめん震えたり揺れたり、灯ったり消えたりしていました。

その下を狐が詩集を持って遊びに行っていたのです。仕立ておろしの紺の背広を着て、赤革の靴もキツキツと鳴ったのです。

キツネ「実に静かな晩ですねえ」

樺の木「ええ」

キツネ「蠍星が向こうを這っていますね。あの赤い大きなやつ」

樺の木「火星とは違うんでしょうか」

キツネ「火星とは違いますよ。火星は惑星ですね、ところがあいつは立派な恒星なんです」

樺の木「惑星、恒星って、どういうんですの」

キツネ「惑星というのはですね、自分で光らないやつです。他から光を受けてやつと光るように見えるんです。恒星のほうは自分で光るやつなんです。お日様なんかはもちろん恒星ですね。あんなに大きくてまぶしいんですが、途方もない遠くから見たら小さな星に見えるんでしょうね」

樺の木「まあ、お日様も星のうちだったんですわね。そうして見ると空にはずいぶん沢山のお日様が、あら、お星さまが、あらやつぱり変だわ、お日様があるんですね」

キツネ「まあそうです」

樺の木「お星さまにはどうして、ああ赤いのや黄のや緑のがあるんでしょうね」

キツネ「星に橙や青や色々ある訳ですか。星というものは、はじめはぼんやりした雲のようなもんだったんです。いまの空にもたくさんあります。アンドロメダにもオリオンにも獵犬座にもみんな。それからリングネビュラというものもあります。魚の口の形ですから、フィッシュマウスネビュラとも言いますね。そんなのが今の空にも沢山あるんです」

樺の木「まあ、魚の口の形の星だなんてどんなに立派でしょう」

キツネ「ええ、それは立派ですよ。僕、前に天文台で見ましたがね」

樺の木「まあ、あたしもいつか見たいわ」

キツネ「見せてあげましょう。僕、実は望遠鏡をドイツのツァイスに注文してあるんです。来年の春までには来ますから、来たらすぐ見せてあげましょう」

ああ、僕はたった一人のお友達にまたつい嘘を云ってしまった。

ああ、僕は本当にダメなやつだ。

けれども、決して悪い気で云ったんじゃない。喜ばせようと思って云ったんだ。

樺の木「うれしい。あなた本当にいつでも親切だわ」

キツネ「ええ。僕はあなたの為ならば、他のどんなことでもやりますよ。

この詩集、ごらんないませんか。ハイネという人ですよ。翻訳ですけれど、中々よく出来てるんです」

樺の木「まあ、お借りしていいんでしょうか」

キツネ「構いませんとも。どうか、ゆつくりごらんなすつて。じゃ、僕もう失礼します。はてな、何か言い残したことがあるような」

樺の木「お星さまの色のことですわ」

キツネ「ああ、そうそう。だけどそれはまた今度にしましょう。僕、あんまり永くお邪魔しちゃいけないから」

樺の木「あら、いいんですよ」

キツネ「僕、また来ますから。じゃ、さよなら。本はあげてきます。じゃ、さよなら」

樺の木はその時吹いてきた南風にざわざわ葉を鳴らしながら、狐の置いていった詩集をとりあげて、天の川やそらいちめんの星から来る微かな明かりにすかして頁を繰りました。

そのハイネの詩集には、ロウレライやささまま美しい歌がいっぱいにあったのです。

樺の木は一晚中読み続けました。

ただ、その野原の三時すぎ、東から金牛宮の昇るころ少しとろとろしただけでした。

夜が明けました。太陽がのぼりました。草には露がきらめき花はみな力いっぱい咲きました。

その東北の方から、溶けた銅の汁を身体中に被ったように朝日をいっばいに浴びて、土神がゆっくりゆっくりやって来ました。

樺の木は何だか少し困ったように思いながら、それでも青い葉をきらきらと動かし土神の来る方を向きました。

土神 「樺の木さん、おはよう」

樺の木 「おはようございます」

土神 「わしはね、どうも考えてみると分からんことがたくさんある」

樺の木 「まあ、どんなことでございますの」

土神 「例えばだね、草というものは黒い土から出るのだがなぜこう青いもんだらう。黄や白の花さえ咲くんだ。どうも分からんねえ」

樺の木 「それは、草の種子が青や白をもっているためではないでございますか  
しょうか」

土神 「そうだ。まあ、そういうええそうだが、それでもやっぱり分からんな。例えば秋のきのこのようなものは種子もなし、土の中からはかり出て行くもんだ。それにもやっぱり赤や黄色や色々ある。分からんねえ」

樺の木 「狐さんにでも聞いてみましたらいかがでございますしょう」

土神 「何だ？狐？狐が何を云いおった」

樺の木 「何も仰ったんではございませんが、ちよつとしたらご存知かと思  
いましたので」

土神 「狐なんぞに神が物を教わるとは一体何たることだ。狐の如きは実に世の害悪だ。ただ一言もまことはなく、卑怯で臆病でそれに非常に妬み深いのだ。畜生の分際として」

樺の木 「もう、あなたの方のお祭りも近づきましたね」

土神 「そうじゃ、あと六日だ。しかしながら、人間どもは不届きだ。近頃は、わしの祭りにも供物一つ持って来ん。おのれ、今度わしの領分に最初に足を入れたものは、きつと泥の底に引き擦り込んでやろう」

土神は日光を受けてまるで燃えるようになりながら、高く腕を組みキリキリ歯噛みをして、その辺をうろうろしていました。

けれども、考えれば考えるほど何もかもしやくにさわってくるらしいのでした。そして、とうとうこらえ切れなくなつて、吠えるようになって荒々しく自分の谷地に帰つて行つたのでした。

土神の住んでいる所は冷たい湿地で、苔や唐草や短い葦などが生えていました。

水がじめじめしてその表面にはあちこち赤い鉄の渋が湧きあがり、見るとからどろどろで気味も悪いのでした。

その真ん中の小さな島のような所になった所に、丸太で拵えた高さ一間ばかりの土神の祠があったのです。

土神はその島に帰ってきて、祠の横に長々と寝そべりました。それから、いかにもむしやくしやするという風に、そのぼろぼろの髪を両手で搔きむしっていました。

その時、谷地の南のほうから一人の木こりがやって来ました。谷地のふちに沿った細い道を大腿に行くのですが、時々気遣わしそうに土神の祠のほうを見ていました。

けれども、木こりには土神の形は見えなかったのです。

土神はそれを見るとよろこんでぱつと顔を熱らせました。

それから、右手をそっちへ突き出して左手で手首を掴み、こっちへ引き寄せるようにしました。

土神は右手のこぶしをゆっくりぐるっと回しました。

木こりがすっかり疲れてばたつと水の中に倒れてしまいますと、大腿にそっちへ歩いて行って、木こりの身体を向こうの草はらのほうへぼんと投げ出しました。

土神「俺のこんなに面白くないというのは、第一は狐のためだ。狐のためよりは樺の木のためだ。」

狐と樺の木とのためだ。けれども、樺の木のほうは俺は怒ってはいないのだ。樺の木を怒らないために俺はこんなに辛いのだ。

樺の木さえどうでも良ければ、狐などはなおさらどうでもいいのだ。俺はいやしいけれども、とにかく神の分際だ。狐のことなどを気になければならないというのは情けない。

それでも気にかかるから仕方ない。樺の木のことなどは忘れてしまえ。ところがどうしても忘れられない。

俺はむしゃくしゃまぎれに、あんなあわれな人間などをいじめたのだ。けれども、仕方がない。誰だってむしゃくしゃしたときは何をするか分からないのだ」

空を一ぴきの鷹が翔けていきました。

さつき草の中に投げ出された木こりはやっと気がついておずおずと起き上がり、しきりにあたりを見廻しました。

それから俄かに立って一目散に逃げ出しました。土神はそれを見て大きな声で笑いました。

土神は自分の祠のまわりをうろろう何べんも歩きまわってから、すっと形を消し融けるように祠の中へ入って行きました。



八月のある霧のふかい晩でした。土神は何とも云えずさびしくて、それにむしゃくしゃして仕方ないので、ふらっと自分の祠を出ました。

足はいつの間にか、あの樺の木の方へ向かっていたのです。本当に土神は樺の木のことを考えると胸がどきっとするのです。

土神「なるべく狐のことなど、樺の木のことなど考えたくないと思ってるのにどうしても出来ない。俺はいやしくも神じゃないか。一本の樺の木が俺に何の値があるというのだ」

土神は毎日毎日、繰り返して自分で自分に教えました。それでも、どうしてもかなしくて仕方なかったのです。

殊にちよつとでもあの狐のことを思い出したら、まるで身体が灼けるくらい辛かったです。

土神はいろいろ深く考えこみながら、だんだん樺の木の近くに参りました。すると俄かに心持が踊るようになりました。

土神「ずいぶん、しばらく行かなかったのだから、ことによったら樺の木は自分を待っているのかも知れない。どうもそうらしい。そうだとすれば大へんに気の毒だ。早く行ってやらなければ、早く」

土神は草をどしどし踏み、胸を踊らせながら大股に歩いて行きました。

キツネ「ええ、もちろんそうなんです。器械的にシンメトリーの法則にばかり叶っているからって、それで美しいというわけにはいかないんです。それは死んだ美です」

ぼんやり月のあかりに澱んだ霧の向こうから狐の声が聞こえてくるの  
でした。

キツネ「ほんとうの美はそんな固定した化石した模型のようなもんじゃな  
いんです」

樺の木「ほんとうにそうだと思いますわ」

キツネ「ですから、どの美学の本にもこれくらいのこと論じてあるんで  
す」

土神「何がそんなにお前を切なくするのか」

樺の木「美学の方の本、沢山おもちですの」

キツネ「ええ、よけいありませんが、まあ日本語と英語とドイツ語のな  
ら大抵ありますね」

土神「たかが樺の木と狐との野原の中での短い会話ではないか」

樺の木「あなたのお書齋、どんなに立派でしょうね」

キツネ「まるで散らばってますよ。研究室兼用ですからね。あつちの隅に  
は顕微鏡、こっちにはロンドンタイムス、大理石のシイザアが転  
がったり、まるつきりごったごたです」

土神「そんなものに心を乱されて、それでもお前は神と云えるか」

樺の木「まあ、立派だわねえ。本当に立派だわ」

土神「ああ、もう飛び出して行って狐を一裂きに裂いてやろうか。けれ  
どもそんなことは夢にも俺の考えるべきことじゃない。俺はいや  
しくも神ではないのか。けれどもその俺というものは何だ。神と  
は何だ。結局、狐にも劣ったもんじゃないか。一体俺はどうすれ  
ばいいのだ」

樺の木「いつかの望遠鏡、まだ来ないんですの」

キツネ「ええ、いつかの望遠鏡ですか。まだ来ないんです。欧州航路は  
分、混乱してますからね。来たらすぐ持ってきてお目にかけます  
よ。土星の環なんかそれあ美しいんですからね」

土神は俄かに両手で耳を押さえて一目散に北のほうへ走りしました。  
黙っていたら自分が何をするか分からないのが恐ろしくなったのです。

そのうち息が続かなくなつてぼったり倒れ、それから大声で泣きました。  
その声は時でもない雷のように空へ行って野原中に聞こえたのです。

そのうちとうとう秋になりました。

樺の木はまだ真っ青でしたが、その辺のいのころぐさはもうすっかり金色の穂を出して風に光っていました。

ある透きとおるように金色の秋の日、土神は大へん上機嫌でした。

今年の夏からのいろいろな辛い思いが何だかぼうつと立派なもやのようなものに変わって、不思議に意地の悪い性質もどこかへ行ってしまうように思いました。

土神「樺の木なども狐と話したいなら話すがいい、両方とも嬉しくて話すのなら本当にいいことなんだ。今日はそのことを樺の木に言うてやろう」

土神は心も軽く樺の木のほうへ歩いて行きました。

土神「樺の木さん、おはよう。実にいい天気だな」

樺の木「おはようございます。いいお天気でございます」

土神「天道というものはありがたいもんだ」

樺の木「全くでございます」

土神「わしはな、今日は大へんに気分がいいんだ。今年の夏から実にいろいろ辛い目にあったのだが、やっと今朝から俄かに心持ちが軽くなった」

樺の木は返事しようとしたが、なぜかそれが非常に重苦しいことのように思えて返事し兼ねました。

土神「わしはいまなら誰のためにでも命をやる。みみずが死ななければならんなら、それにもわしはかわってやっついていいのだ」

樺の木はまた何とか返事しようとしたが、やっぱり何か大へん重苦しくてわずかに吐息をつくばかりでした。

キツネ「樺の木さん、おはよう。そちらにおられるのは土神ですね」

土神「わしは土神だ。いい天気だ。な」

キツネ「お客様のお出での所に上がって失礼いたしました。これはこの間お約束した本です。それから望遠鏡はいつか晴れた晩にお目にかけます。さよなら」

樺の木「まあ、ありがとうございます」

土神はしばらくの間、ただぼんやりと狐を見送って立っていました。

ふと、狐の赤革の靴のキラツと草に光るのにびっくりして我に返ったと思いましたが、俄かに頭がぐらっとしました。

狐がいかにも意地をはったように肩をいからせて、ぐんぐん向こうへ歩いていくのです。

土神「美学の本だの望遠鏡だのと。畜生、さあどうするか見ろ」

土神はいきなり狐のあとを追いかけてきました。

狐もその気配に何気なく後ろを見ましたら、土神がまるで黒くなって嵐のように追ってくるのです。狐はさっと顔色を変え口も曲がり、風のように走って逃げ出しました。

土神はそこら中の草がまっ白な火になって燃えているように思いました。青く光っていた空さえガランとまっ暗な穴になって、その底では赤い焔がどうどう音を立てて燃えると思ったのです。

二人はごうごう鳴って汽車のように走りました。

キツネ「もうおしまいだ、もうおしまいだ。望遠鏡、望遠鏡、望遠鏡」

向こうに小さな赤剥げの丘がありました。狐はその下の丸い穴に飛び込もうとして後あしをちらつとあげたとき、もう土神は後ろからぱつと飛びかかっていました。

と思うと狐はもう土神に身体をねじられて、口を尖らして少し笑ったようになつたまま、ぐんにやりと土神の手の上に首を垂れていたのです。

土神はいきなり狐を地べたに投げつけて、ぐちゃぐちゃ四五へん踏みつけました。それから、いきなり狐の穴の中に飛び込んで行きました。

中はがらんとして暗くただ赤土がきれいに堅められているばかりでした。土神は大きく口を曲げてあけながら、少し変な気がして外に出てきました。

それからぐったり横になっている狐の屍骸のレーンコートのかくしの中に手を入れてみました。その中には茶いろなかもがやの穂が二本だけ入っていました。

土神はさつきからあいていた口をそのまま、まるで途方もない声で泣き出しました。

「けれども決して悪い気で云ったんじゃない。喜ばせようと思って云ったんだ。ええ、そして僕はあなたの為ならばほかのどんなことでもやりますよ。だから…」